# 古代檀像の一遺例
## ―静岡鉄舟寺の千手観音立像

浅湫　毅

### はじめに

京都国立博物館では社寺調査の一環として、平成十一・十二年の二ヵ年にわたり静岡県清水市の鉄舟寺において調査を行なった。[1]その成果は、平成十三年十月二十七日から十二月十六日まで、清水市のフェルケール博物館と鉄舟寺で開催された『鉄舟寺展（旧久能寺宝物展）』（主催・フェルケール博物館／鉄舟寺／清水市教育委員会、特別協力・京都国立博物館）において披露された。このなかで、国宝の久能寺経とともに観覧者の注目を集めたのが、本小論で取り上げる秘仏の木造千手観音立像である。

当像は秘仏であるとはいえ、静岡県の指定文化財となっており、指定に際して調査が行なわれている。しかしこの時の調査は秘仏ということもあり、厨子に納めたままの状態で行なわざるをえなかったとのことであった。今回の調査は、展覧会の準備も兼ねていたため、鉄舟寺のご厚意と、フェルケール博物館、清水市教育委員会のご協力のもと、像を厨子から出し、写真撮影ならびに詳しい調査を行なうことができた。その結果、当像の製作年代がこれまで考えられていた平安中・後期よりも大きく遡るように思われたので、ここに紹介し、諸賢のご教示を賜りたく思う。

### 鉄舟寺について

鉄舟寺は静岡県清水市村松にあり、現在は臨済宗の寺院となっているが、この地に移ったのは十六世紀後半のことである。現在、国宝の久能寺経を所蔵する事でもよくしられているように、もとは久能寺といい、創建当初は静岡市と清水市のちょうど境（現在の住所でいうと静岡市根古屋）の久能山山頂、いま久能山東照宮が建っているあたりにあった。以下、移転前の久能寺を移転後のものと区別する必要がある場合は、旧久能寺と呼ぶことにする。

その歴史を康永元年（一三四二）に成立した『久能寺縁起』（以下『縁起』と略）に基づいてみてみると、創建は推古天皇の時代に久能忠仁が草堂を建て、五寸あまりの小千手観音像を安置したことに始まるという。その後、養老七年（七二三）に行基がここにいたっ

て伽藍を整備し、山中のクスノキをもって、みずから千手観音を刻み、さきの小千手像をその胸中に安置したと伝えられる。以上は伝説的なもので、必ずしも事実を伝えているとはいえないが、その創建が古代にまで遡ると伝えられる点は、一応注意しておくべきかと思われる。ただし、久能山山頂の発掘調査が行なわれたわけではないので、何時からここに寺院が存在していたのかに関しては、現在のところよくわかっていない。

実際に久能寺の存在が確認できる資料としては、同寺が所蔵する銅造の錫杖頭に刻まれた康治元年（一一四二）の年号を持つ銘文が、現状では最も古いものである。[2] また、康平五年（一〇六二）に能快が勧請した十二所権現を、星光坊見蓮が応保二年（一一六二）に再興した際に書写させた『熊野十二所権現勧請札』も伝えられている。[3] しかしこれ以上に時代が遡る具体的な史料には恵まれておらず、その草創については不明というほかはない。『縁起』には「伝教大師比叡山建立ノ後、名僧達下着シテ」云々という記載があり、平安初期には天台との関係がうかがわれるものの、これにしても伝承の域を出ないもので、具体的にはわからない。ただし中世には園城寺末の天台寺院であったことが知られている。

以上のごとく、創建期から平安時代にかけての久能寺の歴史はよくわからないことが多いのだが、中世に入ると比較的資料が残されている。『鉄舟寺展』目録において、渡辺康弘氏が寺の歴史をまとめておられるので、[4] 氏の成果と『縁起』の記載や、寺に所蔵される文書類に基づき、年表風に久能寺の創建期から中世にいたるまでの歴史をまとめると以下のようになる。

| | |
|---|---|
| 推古時代 | 久能忠仁が草堂を建て小千手観音像を安置（※） |
| 養老七年　七二三 | 行基が伽藍を整備し山中のクスノキで千手観音を自刻（※） |
| 康平五年　一〇六二 | 寿勢僧都、法華八講を始める（※） |
| 天仁二年　一一〇九 | 実朗上人、三十講を始める（※） |
| 永久二年　一一一四 | 星光坊見蓮が常行三昧堂建立（※） |
| 康治元年　一一四二 | 『金銅錫杖頭』の銘文に久能寺とある |
| 平治二年　一一六〇 | 仁王講を始める（※） |
| 応保二年　一一六二 | 『熊野十二所権現勧請札』 |
| ？ | 源頼朝、伊豆の所領を寄進（※） |
| 嘉禄年中　一二二五～七 | 大火により伽藍焼失（※） |
| ？ | 伊豆北条の大御堂供養に参加した久能寺の伎楽衆をのせた船が沈む（※） |
| 徳治三年　一三〇八 | 『久能寺田楽装束置文』[5] |
| 元亨四年　一三二四 | 『僧円恵譲状』[6] |
| 康永元年　一三四二 | 『久能寺縁起』成立 |

（※）は『縁起』に基づくことを表わす

これらからうかがうことができるのは、①久能山は古代より観音信仰の地として寺院が存在していた可能性があり、②平安時代に入ってその地に天台宗が進出してきたこと、③鎌倉時代には頼朝をはじめとする鎌倉幕府との関係が深かったこと、④当寺において舞楽がさかんであったこと、などの点である。以上のことは、史料的に『縁起』以外にはほとんど知ることができないが、鉄舟寺に現存す

る作例などと照らしあわせると、ある程度は納得できるものである。まず①は、久能寺が補陀落山という山号をもち、旧久能寺の寺地が観音の聖地にふさわしい海をみおろす山上にあり、かつ、本尊が観音であること。[7] ②は禅堂に安置される本尊が九～十世紀に製作された薬師如来坐像で、[8] この他にも九～十世紀の製作と考えられる像が四躯ほど現存していること。[9] ③に関しては快慶風の如来坐像が現存し、[10] ④は鎌倉期の製作と考えられる舞楽面の陵王が伝存していること、[11] などである。



挿図1

中世以降は、南北朝から室町時代にかけて今川氏との関わりが深かったようで、今川氏関係の書状などが、現在も鉄舟寺には多く残されている。そして、武田氏によって現在の寺地に移されたのは、永禄十一～二年（一五六八～九）のことと伝えられている。移転後は真言宗へと宗旨を移し、明治にはいると廃仏毀釈のなかで寺運が衰えたが、山岡鉄舟によって臨済宗の寺として再興され、鉄舟寺と名をかえ、今日にいたっている。

現在の伽藍をみると、本堂背後の山頂には観音堂と毘沙門堂、山麓の境内地には仁王門、[12] 本堂、禅堂（宝物殿）などがあり、神仏分離のため現在では付近の人々によって管理されているが、境内には十二祖神社（十二所権現社）がある。このうち、建築様式からみて永禄の移築当初まで遡る可能性がある建造物は観音堂のみとのことである。[13]

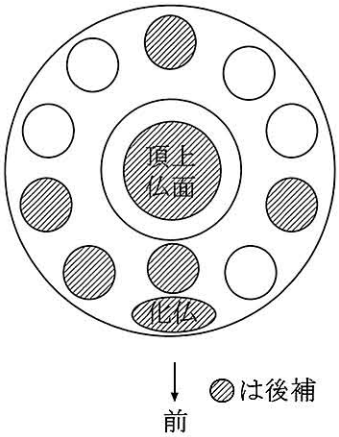
## 千手観音像の像容

本像（図版1～5）は、現在、伽藍背後の山上に築かれた観音堂（挿図1）に安置される千手観音で、冒頭にも述べたように、通常は秘仏として厨子の扉はかたく閉ざされている。

像高は頂上仏面までで一五四センチほどあり、等身よりもひとまわり小さい立像である。[14] カヤまたはヒノキかとみられる針葉樹をもちいた一木彫成像で、木心は像の右後方に去り、内刳はほどこさない。

頭体幹部を、宝鉢手までを含めて一材から彫りだし、合掌手、脇手、化仏、頭上面および天衣垂下部は別材を寄せる。現状では合掌手、宝鉢手まで含めて全部で四十四臂あり、そのうち一組を頭上で重ねる、いわゆる清水寺式の千手観音像である。右脚をわずかに前に出し、蓮華座上に立つ。正面からみると下半身には動きがあるが、上半身はほっそりとして抑揚がない。この傾向は側面（図版3）から

みると一層明瞭で、体奥が薄い。また、胸を引いて腹を出した姿勢は、いわゆる「く」の字状を呈している。彩色は髪、眼、唇のみにほどこされる（全体を檀色に染めている可能性もあるが、このことは後述する）。後補の部分は頂上仏面、頭上面のうち五面、化仏、合掌手、脇手すべて、天衣垂下部、それからこまかいところだが、両肩から下がる天衣の外縁部分も細い板材を矧寄せた後補である。合掌手の矧ぎ目に関しては、錆漆かと思われるものが塗られているためわかりづらいのだが、木目からみて、別材を肘先あたりで矧いでいるものと思われる。手や腕釧の形からみて、脇手と同時期の後補と考えられる。



挿図2

挿図3

さて、細部を上から順に見ていくと、頂上面および化仏は後補だが、頭上面十面のうち五面は当初のものかと思われる（挿図2・3）。天冠台は紐二条のうえに列弁を表わし、前後左右の四方に花形を彫出する。そして、後頭部ではまっすぐに彫られた天冠台は、左右の花形のところで角度を変え、上方にカーブを描いて盛り上がる（図版5）。列弁は正面部分では子弁を刻出する。花形は四弁花で、各花弁は縁を斜めに面取りをしているため一見すると十二弁のようにも見える。彫技は必ずしも巧みとはいえないが、丁寧な彫りがなされていることに気づく。面部は眉から眼窩にかけては彫りが浅く、鼻梁、唇なども小ぶりに表わされる。面部の表現で特筆されるのは、吊り上った眼と、息を静かに吐き出すかのように上唇をとがらせた口の形である（図版5）。なにかを調伏するかのような容貌といえよう。

体部に目を移すと、上半身には天衣、条帛、胸飾を着ける。胸飾は内側から紐二条、連珠、紐、列弁という構成で（図版4）、本体と共木から彫出される。天衣は両肩で大きく広がり、脇のあたりで絞ったかのように、急に細くなって垂下する。そして注目すべき点は、天衣右垂下部の、条帛をこえて裳上端にいたるまでの部分は、肉身部との間を彫り透かしていることである（挿図4）。のちに触れるが、これは当像が檀像を意識して製作されていることを物語る大きな特徴のひとつである。

下半身には裳、腰帯、腰布をまとう。腰布の下端には陰刻線で文様を表わし、上から紐、連珠、紐、四つ目入り斜格子、紐、房飾（綾杉文状）という構成になっている（挿図5）。この部分の文様は一見すると彫りが粗く、後補のようにもみえるが、連珠部分の形状が胸飾の連珠と同様の彫りとなっており、当初からのものとみてよいだろう。これも檀像を意識しての装飾と考えられる。そして像底には中央に本体と共木で枘を彫出する（挿図6）。ただし、枘は長三・九～四・一センチ、幅と奥行は底部で三・九×二・九センチしかなく、本体に比べ現状ではあまりにも小さい。当初の枘を切り詰めたか、あるいは想像をたくましくすれば、当初は蓮肉部までを一材か

ら彫り出していたものを、傷んだために後世枘状に作りなおしたものであろうか。

さて、既に述べたように、以上の細部の観察から気づくことは、宝鉢手は本体と共木で、条帛の垂下部と肉身のあいだは彫りすかし、腰布の裾には細かい模様を彫り出す点や、頭髪と唇以外には色彩をほどこさない点など、当像は強く檀像を意識して製作されていることである。檀色が施されているかどうかはわかりにくいのだが、部分的には褐色にみえるところもあり、蘇芳染めなどをして、赤栴檀様に檀色が施されていた可能性も考えられる。後補の頭上面や脇手などはよく褐色を呈しているので、これが当初の色彩にあわせてのものとするならば、かつては当初部分も褐色であったかと思われる。しかし、檀色の有無いずれにせよ、当像が檀像を意識して製作されたことはあきらかで、カヤまたはヒノキを用いた代用檀像の一例であることは間違いない。

## 伝来および製作年代について

前章でみたように代用檀像として製作された当像であるが、本章では、その伝来と製作年代について考えてみたい。

当像に関する記録としてまず注目されるのは、江戸時代の元禄十六年（一七〇三）に著された『駿府巡検帳』の久能寺に関する記載である。これは駿河国の諸社寺をめぐって、その堂宇や尊像を記録したもので、現在、享保十五年（一七三〇）の写本が伝わっている。関係部分を書き出すと「一　本堂五間半五ケン萱フキ　一　前立千手観音立像五尺余御首ハ弘法作／一　本尊ハ宮殿ノ内ニ安置　立像五尺行基作但閉帳／一　左右ニ古仏観音一体宛有之立像之作者不知　一　左右ニ二十八仏

挿図4

挿図5

挿図6

挿図9

挿図8

挿図7

有」とある（／は改行を示す）。

本堂というのが、五間半・五間という大きさからみて、現在の観音堂にあたると思われる。そして、前立として記されるのが、わざわざ首だけが弘法大師の作と断っていることから考えて、頭部のみ平安後期の作とみられる、現在本堂に本尊として祀られる千手観音（挿図7）であると考えられる。[15] 続く宮殿内に祀られる行基作の本尊というのが当像にあたる。帳を閉じると書かれていることからみると、元禄の段階で既に秘仏であったことがわかる。そのあとに記される左右の古仏観音は現在寺内に確認できないが、あるいは禅堂（宝物殿）に安置される、伝日光・月光（梵天・帝釈天）立像（挿図8・9）のことを指している可能性もある。二十八仏というのは現在も厨子の両脇に祀られる二十八部衆を指すことはいうまでもない。

先述のように、久能寺は永禄十一～二年（一五六八～九）、武田氏によって現在の寺地に移されたのだが、現寺地は、かつては妙音寺とよばれており、久能寺移転以前にも寺院が存在していたようで、[16] 可能性としては、この寺の旧安置仏ということも考えられる。しかしながら、この妙音寺に関しても、伽藍規模、安置仏ともに記録が残っていないため、当像が旧久能寺から移されたものか、それとも妙音寺の旧仏なのか、不明というほかない。もっとも妙音寺が久能寺移転まで存続していたのか、それとも、はやくに廃寺となり、地名にのみその名をとどめていただけであったのかもわかっていないのではあるが。

その一方で、久能寺が現寺地に移転する直前の永禄八年に、今川氏が旧寺地において観音堂を再興したという記録が残っており、[註17] その時点で、旧久能寺に観音堂があったということは確かである。し

かし、その安置仏に関しては何も記されていないので、当像がここに安置されていたかどうかに関しても確証がない。また、『縁起』にある行基自刻の千手観音像はクスノキ製とされるので、針葉樹材から彫出された当像と、これを直ちに結びつけることも慎重にならざるを得ない。したがって伝来に関しては、『縁起』や伝承の類を含めても、『駿府巡検帳』が当像の記録として最も遡るものということができよう。

以上のごとく、当像の伝来は記録上、十八世紀初頭までしか遡りえず、現寺地に移転する以前の状況については不明というほかない。したがって、製作年代に関しては作風から考えるしか手がかりがない。

まず、全体からみると、後補の合掌手と脇手をのぞいて一木から彫り出すという構造は古様である。側面観も、胸を引きぎみにしてやや腹を出した姿勢は、いわゆる「く」の字状を呈し（図版3）、白鳳時代から奈良時代にかけて製作された仏像に顕著なもので、これも古様な特徴を示しているといえよう。また、枘を本体と共木から彫出する点も古様さを示すものといえるだろう。

細部に目をうつすと、吊り眼ぎみで唇をとがらせた表情（図版4・5）は、福井県小浜市の多田寺に所蔵される十一面観音立像のそれに通じるものがある。胸飾は副帯などをもたず主帯だけで、内から紐二条、連珠、紐、列弁から構成されるシンプルなものだが（図版4）、この主帯の構成は唐招提寺の十一面観音、山口・神福寺の同じく十一面観音にみられる紐、連珠、紐、列弁という構成と近いものといえる。この唐招提寺、神福寺像の胸飾は、松田誠一郎氏によって「天平勝宝六年（七五四）の鑑真来朝に際して檀像とともにもたらされた形式と考えることができ」る、との指摘がなされている。[18]

このほかにも古様な要素としては、天衣が脇のあたりで絞ったかのように急に細くなる点、腰布や裳のおりかえし部分の衣文が左右対称で、いわゆる品字形の衣文を描く点（挿図10）なども指摘できよう。前者は、法隆寺献納宝物（東京国立博物館保管）をはじめとする、七世紀後半から八世紀にかけて製作された金銅製の菩薩像に散見される特徴である。木彫像としては和歌山・円満寺の十一面観音立像[19]などにみられる。



挿図10

これらの特徴から本像の製作年代を考えると、まず上限は松田氏の胸飾の形式研究に基づけば、鑑真の来朝に求めることができよう。[20]一方の下限は、当像が請来檀像を手本にして製作されたものとの前提に立つと、もととなった檀像が古様であれば、当然それをもとに製作された像も古様なものとなるため、なかなか決め難い。しかしながら、「く」の字を呈する側面観に時代が表われているとみれば、さほど下げる必要もないように思われる。既に述べたが、当像の表情は、奈良時代後半の作とされる多田寺の十一面観音と近いものがあり、天衣や裳、腰布の折り返しの形式なども奈良時代、あるいは

それ以前の作例と共通する特徴ということができよう。また、量感の面からみても、正面観、側面観ともに、平安前期の作例にみられるような量塊性は感じられず、当像が平安前期彫刻の影響がおよぶ以前に製作されたことを示しているように思われる。[21] したがって当像は、奈良時代の八世紀後半から、おそくとも平安初期の九世紀はじめころまでには製作されたものとみてよいのではないだろうか。そして、たとえば鑑真請来像をはじめとする、八世紀後半頃に中国より請来された檀像、あるいはそれを写した図様をもととして製作された可能性が考えられる。

## 請来檀像との関係

最後に、前章で指摘した当像と請来檀像との関係についてみておきたい。胸飾の形式などから、当像が鑑真請来檀像との関係がうかがわれることは既に述べたとおりであるが、『唐大和上東征伝』をみると、鑑真が来朝に際して「舎利三千粒」などとともに「彫白栴檀千手像一躯」を請来したことが記されている。[22] これがどのような像容のものであったかは想像するすべもないが、可能性としては当像がこれをもとに製作されたということも考えられなくはない。しかしその前に、当像は宝鉢手をのぞいた脇手、および合掌手がいずれも後補であり、はたして造像当初から千手観音であったのか、という問題を、まずは考えなければならないだろう。

現状では後補の脇手は上膊に直接打ち付けてあるが、その下をよくみると、プリーツ状に波打つ天衣の下端の続きが刻まれている。写真ではみづらいかもしれないが、（挿図11）がその部分である。当初から上膊に脇手を矧ぎ寄せていたのであれば、このように天衣の端を続けて刻む必要はなく、あるいは、当初この部分に脇手はなかったのではないかとも思われる。また、背面から合掌手、宝鉢手の肘部分をみると、直角に切り取られたようになっている（挿図12）。このような形状は、合掌手、宝鉢手とほぼ同径の、もう一ないし二対の腕がこの部分から垂下していたとみると、しっくりとするように思われる。したがって当像は造像当初、十一面六臂または八臂像であった可能性もあるのではなかろうか。

さて、十一面六臂像については中国・揚州から出土した唐代の作例が、長岡龍作氏によって紹介されている。[23] 長岡氏は、これらを十一面観音であるとしており、これにしたがえば、当像

挿図11

挿図12

がもし六臂像であったならば十一面観音として造像されたということになろうか。同氏論文中に、小泉経一氏旧蔵の六臂十一面観音像が取り上げられているが[24]、これをみると合掌手、宝鉢手に加えて一対が宝鉢手の下側に作り出された六臂像であり、宝鉢手が必ずしも千手観音であることの標識ではないことを示している。

この問題に関しては確証があるわけではなく、現在とは別の方法で脇手を表わしていた可能性も大いにありうる。たとえば唐招提寺金堂の千手観音立像のように、太い脇手の間にさらに細い脇手を寄せている例もあり、当像の場合も六ないし八の太い腕の間に細い脇手を寄せていたということも考えられる。したがって、現時点では六臂または八臂であった可能性の指摘のみにとどめておきたい。ただし、いずれであったにせよ、中国・揚州地方で製作された檀像との関係が想定できよう。というのも、鑑真請来の「彫白栴檀千手像」は、和上が日本へわたる直前まで住した揚州で製作されたものに違いなく[註25]、当像が鑑真請来像を本歌として製作された千手観音であったとしたら、その源流は揚州にあることになる。一方で、十一面六臂像であったとしても、天冠台や胸飾などの形式に鑑真請来像との共通性があることや、長岡龍作氏の論文にもあるように、この種の十一面観音が揚州においてかなりの数発見されていることなどを思えば、その手本とした像は鑑真請来像と直接の関係がないとしても、やはり揚州で製作された檀像であった可能性が考えられるからである。よって、鉄舟寺の千手観音立像は揚州からの請来檀像、あるいはそれをもととした図様を手本に製作された、という可能性を指摘することができよう。

## おわりに

以上、鉄舟寺（久能寺）の略史、千手観音立像の像容、伝来、製作年代、そして請来檀像との関係をみてきた。

その結果、鉄舟寺の千手観音立像に関して、

一、像容からみて代用檀像として製作されたこと

二、伝来に関して、記録上からは江戸時代までしか遡り得ないこと

三、奈良時代後半から平安時代はじめにかけて製作されたと思われること

四、造像当初は六臂または八臂像であった可能性もあること

五、中国・揚州地方で製作された檀像との関係がうかがわれること

という五点を指摘した。

第一、第二の点に関しては問題ないと思われるが、第三の点、すなわち製作年代に関しては異論もあろうかと思う。他に類例もなく、また、檀像あるいはそれをもととした図様に基づく製作と思われるため、明確な製作年代は決めがたいのではあるが、本文中で述べたように、筆者としては、いくつもの点で古様さを認めることができることから、奈良時代後半から平安時代はじめの作とみておきたい。諸賢のご批判、ご叱正を賜われば幸いである。

第四、第五の点に関しては重要な問題を含んでいると思われるが、可能性の指摘のみにとどまり、深く考察できなかった。これは、ひとえに筆者の能力不足によるものである。中国での檀像製作の実態という問題ともあわせ、今後の課題としたい。

〈註〉

1 平成十一年度は十二月六日から十日、平成十二年度は六月十二日から十七日にかけて行なった。

2 『鉄舟寺展』目録（フェルケール博物館　二〇〇一年十月）作品番号81以下、銘文の翻刻を載せる。

「奉施入錫杖
康治元年壬戌
久能寺念空
九月八日丁酉」

3 『静岡県史』（資料編四　古代）一〇九三頁　一九八九年

4 渡辺康弘「素描　補陀落山久能寺の歴史」『鉄舟寺展』目録

5 『鉄舟寺展』目録　作品番号37

6 『鉄舟寺展』目録　作品番号38

7 ただし、行基との関係は伝承の域を出るものではない。

8 木造薬師如来坐像（『鉄舟寺展』目録　作品番号5）

9 木造毘沙門天立像（『鉄舟寺展』目録　作品番号2）
木造梵天・帝釈天〈伝日光・月光菩薩〉立像（挿図9・10、同目録作品番号6・7）
木造地蔵菩薩立像（同目録　作品番号9）
ただし、これらが当初から当寺に安置されていたものか、他寺からの移入であるかに関しては不明である。

10 木造菩薩坐像（『鉄舟寺展』目録　作品番号10）
鎌倉幕府と慶派仏師の関係についてはここで述べるまでもないが、当寺に快慶風の像が現存することは、当寺と幕府の関係の傍証となるものであろう。

11 木造陵王面（『鉄舟寺展』目録　作品番号11）

12 仁王門には、寛永二年（一六二五）の銘がある仁王像が安置されている。

13 外陣は後世の手が加えられているが、内陣および厨子（宮殿）は、建築の様式からみて永禄移築時あるいはそれ以前にまで遡る可能性があるという。渡辺康弘氏のご教示による。

14 詳しい法量は次のとおり。単位はセンチメートル。

総　高　一七七・五（台座含む）
像　高　一五四・〇（頂上仏面まで）
髪際高　一三一・八
面　長　十五・四
耳　張　十九・〇
面　幅　十三・八
肘　張　四〇・六（合掌手）
裾　張　三八・六

15 頭部のみ平安十二世紀の作で、体部は室町以降の後補と考えられる。

16 この妙音寺に関しては、渡辺康弘氏が、久能寺の支院のひとつであった可能性を指摘している。
渡辺康弘前掲論文（註4）

17 「今川氏真朱印状」『鉄舟寺展』目録　作品番号52

18 松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」『東大寺と平城京』（日本美術全集　四）講談社　一九九〇年

19 和歌山・円満寺の十一面観音立像の製作年代に関しては、小田誠太郎氏より八世紀後半との見解が出されている。また、円満寺像は平成八年に国の重要文化財に指定されているが、指定に際しての文化庁文化財保護部の見解もほぼ同様で、八世紀なかばから後半としている。
小田誠太郎「円満寺の木造十一面観音立像について」『和歌山県立博物館研究紀要』一　一九九六年
文化庁文化財保護部「新指定の文化財」『月刊文化財』七月号　第一法規　一九九六年

20 また、松田氏によると、天冠台が途中で角度を変えて曲線を描いて盛り上がるのも、鑑真来朝以降にみられる特徴であるという。本稿は東京文化財研究所で平成十三年十二月一日に行なった発表に基づくが、発表後に松田氏より口頭でご教示賜った。

21 例えば、千葉・小松寺の薬師如来立像は八七〇年代あたりの製作とする説があるように（紺野敏文「小松寺蔵　薬師如来立像」『國華』一二六五　二〇〇一年）、平安前期の作例と考えられるものだが、体奥の薄い作りや吊り上がった眼の表現など、鉄舟寺像と共通する点があるものの、正面観においては大きな違いがある。すなわち小松寺像か

らは平安前期彫刻に特有の量塊性をうかがうことができ、いわばその形式化という様相を呈しているのに対し、鉄舟寺像では平安前期的な量塊性はまったく感じることができない。

22 『大正新修大蔵経』五一―九九三a

23 長岡氏はこれらを唐時代の八世紀後半から九世紀の作としている。長岡龍作「十一面観音再考」『美術史学』一〇　東北大学文学部美学美術史研究室　一九八八年

24 前出（註23）の長岡論文によると、現在の所在は不明ということである。

25 鑑真和上はよく知られているように、五度にわたる失敗ののち、ようやく天平勝宝五年（七五三）十二月に日本への渡航に成功する（奈良へ到るのは翌年）。その際、蘇州より出港したが、直前までは揚州に住していた。また、和上はもとより揚州江陽県の人で、揚州との所縁は深い。

［附記］

本研究は京都国立博物館による「社寺調査」の成果の一部である。調査にあたっては、鉄舟寺住職の香村俊明師よりご厚誼を賜わり、渡辺康弘氏（清水市教育委員会）、西野和豊氏（フェルケール博物館）、横田泰之氏（東海道広重美術館）からはひとかたならぬご協力を賜わった。また、山本勉氏（東京国立博物館）、松田誠一郎氏（東京芸術大学）、奥健夫氏（文化庁）からは貴重な助言をいただいた。文末ではあるがお名前を記して感謝の意を捧げたい。

なお、本稿は平成十三年十二月一日に東京文化財研究所で開催された『彩色文化財における日独共同研究会』での発表原稿に、加筆訂正したものである。